



折口信夫（釈迢空）の芸術・学術(II)

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2012-11-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 中塩, 清臣 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.32150/00000919

折口信夫(釈迢空)の芸術・学術-II

中 塩 清 臣

北海道学芸大学岩見沢分校国文学研究室

Kiyo-omi NAKASHIHO : Shinobu ORIKUCHI (Chōkū SHAKU)'s Work

1 恋愛文学の基層

一 中臣朝臣宅守、蔵部の女孀狭野弟上娘子によせゆゑののれとむかのなとがを娶まきしとき、勅みことして流罪に断じて、越前の国に配なしき。ここに夫婦、別れ易く会あひ難きを相嘆あはき、おのおおのも憫あはむ情なさけを陳いたべて、贈り答こたふる歌63首。(「万葉集」巻15・目録)

時・所・人を総合してみると、まるで宅守・娘子の手記とも、思惟されるかもしれない。だがこういう種類の相聞往来の保存は、どのようにして可能だつたらう。それに「万葉集」の本文の成立以前に、どういう経緯なり条件なりをたどつて、ふたりの作品が一括され編集をみるにいたつたのか。宅守・娘子が合著の形式をもつて自撰発表をこころみたのであろうか。どうもそうでないとするなら、第三者の設計を想定しなければならない。つまり「続日本紀」の記載は、ひとまずみとめてゆくしかない。だからといつて同時に、ただちに「万葉集」の歌まで配列順に、ときの当座吟としてうけとることができる、という結論にはならない。事件は事件として真相をつきとめ歌を歌として、截然と別途にわけて秩序を追う必要がある。

63首にのぼる詠唱組曲は、物語歌→芸謡の様式に属している。いま63首をかぞえることができても、これさえ時運にしたがつての浮動数で、偶然そういう定着のしかたをした場合の筆録→転写にすぎない。ことごとくすべてフィクションか、いくつかの即物諷を主軸にして展開させられたデフォーメーションか、現に正史のうえの実在人物のノートによるにしても、この編輯につとめた態度から徴すると、「歌物語」としての処理にある。すでに「ことのかたりごと」となつていたからである。宅守も娘子もともに感情移入にたやすい階層であつたし、宮延という一とかく理想郷あつかいされがちな一境遇を、背景に綾なしてくるのは、社会的にすこぶるアピールするところがある。宅守・娘子の相聞グループに表現されたかぎり、宅守の人間像は中臣語部によつてうけつがれてきた、物語歌および歌物語の主人公である。どこまでも「文学」であつてドキュメントではない。中臣語部の Poetical I の立場からモンタージュされた心理小説、ことに日本の書簡体恋愛小説の濫觴をしめす。中臣宅守は「伊勢物語」→「在五中將の日記」の在原業平の先蹤である。

一 ちりひぢの数にもあらぬわれゆゑに思ひわぶらむ妹が悲しさ (「万葉集」巻15の3727)

一 かくばかり恋ひむとかねて知らませば妹をば見ずぞあるべくありける (…… 3739)

「ちりひぢの…」という歌は、「拾遺集」で「題しらず」・「よみ人しらず」になつている(巻14の872)。「かくばかり…」が「風雅集」に4~5句を、「…妹をば見ずもあるべかりける」として、「よみ人しらず」という(巻10の1027)。「ちりひぢの」は万葉集でここひとつだけ、二十一代集をさがすと、ほかには風雅集に、「…ちりひぢのつもりてなれる…」(巻16の1692)しか

ない。「古今集」の序の「…高き山もふもとのちりひぢよりなりて…」から、修辭をえているのであろう。こういう特殊語彙をもつた歌が、拾遺集にさえ「よみ人しらず」で、のせられてきた回転軸の曲折にも、問題解決の鍵がひそむ。俊成の「古来風躰抄」でも宅守をとりあげていない。

書契化におよぶさき贈答歌63首は、優倡か偶人かによる演劇台本→戯曲構成の一部だつたのであろう。歌詞—うたう要素—と歌詞とのあいだには、かなり委細をつくす地の文—かたる要素が、あつたのにちがいない。かきとめられてのちに、採択されて万葉集巻15へ、みちびきいれられた工程が、万葉集の目録・題詞・左註から、推定される場所である。うたわれていく内容の副表現として、演技をとらない所作がふりつけられた。歌(→抒情詩)をむすぶ物語(→叙事詩)があつて、歌のやりとりは会話—贈答歌は対話である。声楽に加えて器楽の一弾く・拍つ・叩く・吹く—諸形式を伴奏にもつ。有耶無耶の烏有人物であつても、幾時代かをかいくぐるにつれて、バソナリテーをうみだし、したいに芸術体系をかたちづくつてゆく。してみると正史と伝説とそれから文学作用と、からみつきもつれあいながらおこす、連鎖反応の軌跡をうべなうこともできるであろう。

一 ゆふぐれは雲のはたてにものぞおもふ天つ空なる人を恋ふとて (「古今集」巻11の484)

悲恋に根ざす青春彷徨のありようを、山河こえわたる地理感覚で律する説話法にしても、いつも貴種漂泊—神遍歴→天子潜幸→英雄放浪—古譚につながる構造序列にあるばかりか、かさねて吟遊伶人(ほかいびと・くぐつ)の生活動態の輻射でもあつた。流寓のよすがを国憲背馳にことよせるのは、もう法制の確立以後の合理であろう。古代へさかのぼるほど個性のない文化条件ではあつたが、やはり時代感情をみちびきやがて示標となる契機は、さすがに没個性ではない。専門作家の叙事詩・抒情詩の改作・新作が、したいに好尚にかなないポピュラライズされて、邑落づたいにめぐつて芸能化をふかめてきたのである。実のところ宅守流謫の事件内容はあきらかではない。女孺の純潔失格の罰という仮託相聞なら、姦通小説—色懺悔物へ展開する局面—である。こういう精神構造史に即して、寄与し感化をいちじるしくした、西漸の晋・唐文学の位相も、つぶさにかえりみられなければならない。万葉集の「相聞」から「続万葉集」・「新撰万葉集」を経て、「古今集」の恋歌におよぶ座標につながるからである。

一 あしひきの山路越えむとする君を心にもちて安けくもなし (「万葉集」巻15の3723)

一 君が行く道のながてを繰り畳ね焼きほろぼさむ天の火もがも (…… 3724)

一 わが背子しけだし寵らばしろたへの袖を振らさね見つつ偲はむ (…… 3725)

一 この頃は恋ひつつもあらむたましくしげ明けてをちより為方なかるべし (…… 3726)

宅守・娘子の相聞聯唱のプロローグ4首、目録によると「別れに臨みて娘子の悲しび嘆きて作る歌四首」、左註で「右の四首は、娘子の別れに臨みて作る歌なり」という。ときに万葉集の「相聞」と謳う分類法は、巻2からはじまり開巻してその第1が、「磐姫皇后の天皇を思ひたてまつる御作歌四首」、

一 君が行き日長くなりぬ山たづね迎へか行かむ待ちにか待たむ (…… 85)

一 かくばかり恋ひつつあらずは高山の磐根し枕きて死なましものを (…… 86)

一 ありつつも君をば待たむうち靡くわが黒髪に霜のおくまでに (……87 →「古今和歌六帖」第5)

一 秋の田の穂の上に霧らふ朝霞いづへのかたにわが恋ひやまむ (…… 88)

そこでまずふたつの組歌を、校勘照合することによつて、恋愛文学の発生基層の序列・形成工程の路線を、まさぐることができる。磐姫皇后の場合は、「贈」に対して天皇の「答」がない。

もちろん磐姫の実作なら、集で最古のものであろう。だが伝説にすぎないことは、「君が行き…」の第3—5句が「…山たづの迎へを往かむ待ちには待たじ」になつて、「古事記にいはいく、…衣通王の恋慕に堪へずして、追ひ往くときの歌…」という（……90）。

一 右の一首の歌は、古事記と類聚歌林と説くところ同じからず。歌の主もまた異なり。よりにて日本紀を検ふるにいはいく、…

古事記と類聚歌林との異伝にまつはる問題処理として、べつに仁徳紀・允恭紀とのつながりかたを提起している。「君が行き……」の作品をめぐつて、仁徳の皇后磐姫という口伝と、仁徳の皇子允恭天皇の皇女軽太郎女（→衣通王→衣通郎女）にあてる本縁とが、ひとしくならびおこなわれてきたわけになる。ところが伝承管理のみちすがら、「山たづね…」・「山たづの…」と両態に分化して、ついには原典成立までも未詳に帰している。「山たづの…」の脚註にいう造木は、新撰字鏡・類聚名義抄にもとめるとにはとこだが、ことさらここの「たづ」は「鶴」（つるの古名一鶴・鶴）の副意識をたもつ。水禽類涉禽類の候鳥・漂鳥が、降神作法・招魂呪術の触媒・迎代だつた民俗印象から。天田振の「天飛む軽（→雁）のをとめ…」・「天飛ぶ鳥も使ぞ鶴が音の…」にしても、「山たづね」の実修方式にそつている構図で、白鳥処女と衣通郎女とのモニター・ジュさえ浮き彫りにする。精神の喪失とか生命の危篤とかに際し、また歿後に蘇生をはかり復活をはげます手段として、いとなむ鎮魂呪法（たまよばい→たまむかい→たまふり→たまむすび→たましづめ）が「山たづね」。巻2の「山たづね」は「君が行き」と呼応した名詞形、それに「…山たづの迎へ」とも映発している。

一 …桜ばな さきなむときに 山たづの 迎へ参でむ 君が来まさば（「万葉集」巻6の971）

山稜・山狭のかしこに靈魂が、たむろする一神づまり神つどふ一禁忌の異郷を、認定していたからである。たまふり・たましづめの前提条件として、たまごい・たまむかえをしたので、語形定着後にはこい・むかえとだけいうようになつた。「…山たづね迎へか行かむ…」・「…山たづの迎へを往かむ…」は、靈乞い・靈迎え操作の慣用表現である。「かくばかりこひつつあらずは…」といつて、「…高山の磐根し枕きて死なましものを」（86）とうけとめてくることも、こういう生活空間の心理のからくりをうちだす。まして「靈乞ひ」をめぐる觀念が、幽明二界の神人交渉から、異性間の恋愛関係にまで聯合してきて、のちには恋歌が相聞往来の主要部位を占めるようになつた。相聞は生靈のため挽歌が死靈のための路線にあるが、とにかくふたつともに「靈乞ひ」の方式をふむので、相聞と挽歌とは異体ながら同根→等質のわけになる。

この磐姫皇后の4首も、もとは挽歌にちがいない。それを相聞として新解釈づけてから、万葉集へ導入をみたのであろう。女性の鎮魂歌…怒り=嫉妬（うわなりねたみ）をなごめる巫咒歌として、巻2の最初に配列されている編輯意図も、巻1の劈頭にたけだけしかつた雄略天皇の伝御製の存在理由も、たがいにかよところのものである。だから性別はちがうけれども、どちらも求愛歌のかたちをとつている。古代の歌一般は書契化されるまでに、どれほどの変遷転移の成立史をくぐつているか、もう想像をこえるものがあるにちがいない。すくなくとも記紀・万葉の歌謡は、数次の改替をへたパァリエーションにほかならない。所伝の作者と詠唱との関聯にしてもひとたびうたがつてみる余地はかなりある。「磐姫皇后の天皇を思ひたてまつる御作歌4首」という題詞さえも、歴史小説の創作技法とあまりかわらない。しかも仁徳天皇・磐姫皇后の歌物語は、質量とも記紀の大部をかざつている。

一 君が行き日長くなりぬ奈良路なる山齋の木立も神さびにけり（「万葉集」巻5の867）

「かくばかり恋…」も「…恋ひつつあらずは…」も類型発想である。

- 一 おくれゐて恋ひつつあらずは… (巻2の115・巻4の544・巻13の3205)
- 一 おくれゐてわれやは恋ひむ… (巻9の1771~2)
- 一 おくれゐてなが恋ひせずは… (巻5の864)
- 一 おくれゐてわが恋ひをれば… (巻9の1681)
- 一 わぎもこに恋ひつつあらずは… (巻2の120)
- 一 …君に恋ひつつ生けらずは… (巻10の2282)

愛と死とをあつかう表現の論理構造は、まつたく同心円のうえにかさなりあう。だが生への認識のふかまるにつれて、愛と死とにむかう回転軸の位置が、すこしづつずれはじめてゆく。「万葉集」巻12は「古今の相聞往来の歌の類」、その「別れを悲しぶる歌」からの抄、

一 あしびきの片山雉立ちゆかむ君におく^{かたやまきざし}れてう^{おんこくろ}つし^ろけ^ろめ^ろや^ろも (3210)

狭野弟上娘子の「京に留りて悲しび傷みて作る歌」より、

一 春の日のうらがなしきにおく^{かたやまきざし}れ^ろて^ろ君^ろに^ろ恋^ろひ^ろつ^ろつ^ろう^ろつ^ろし^ろけ^ろめ^ろや^ろも (3752)

磐姫の「…君をば待たむ…わが黒髪に霜のおくまでに」の別本の歌が、「居明かして君をば待たむぬばたまのわが黒髪に霜はふるとも」(巻2の89)である。左註には「古歌集の中にいづ」と、テキスト校訂をこころみている。けれども「古今六帖」第5で<かみ>に分類して、「のちつひに君をば待たむうちなびきわが黒髪に雪はふるとも」となつて人麻呂の諷詠という。ふたたび万葉集巻12の「物に寄せて思ひを陳ぶる歌」から、

一 君待つと庭にしをればうち靡くわが黒髪に霜ぞおきにける (3044)

してみると磐姫作という状況説明でさえ、どうしても合理主義以外のものではない。恋の主題追求で黒髪と霜とをとりあわせるモチーフは、はるかに近代の律文ジャンルの情趣までも規範づけ、たとえば長唄「黒髪」や地唄「雪」一霜の変異一にちらつている。

弟上娘子の激越をかくせぬよみあげかたは、先蹤の挽歌→誄詞の修辭法から、分離し脱却しきつていないためである。発想法は挽歌の慟哭要因がもつ強調作用にしたがう。遠国流浪の愛人への哀慕と、幽界逝去の死霊への慰撫と、ながめる次元をひとつにしている。共通基層はたまごい→たまむかえだつたのだから、冥路へかくれた遊離魂にむかい、復帰再来を愁許・懇願する一うたを語幹としてうたふ(四段活)・うつたふ(下二段活)一のが、挽歌がたどるナラタージュの原則である。感愛なり悲愴なり縷縷あらわして同情をさそい共感をもとめる。泣くことは和めることになる通過儀礼が殯→荒城…。誄歌に賀詞・頌辭の性格が際だつ事由である。それに誓約としての妥結が、みられるのは鎮詞系統の覆奏だから。そういう有機関係が、死者の場合でなくて、生人にむかうときには、相聞をかたちづくる。相聞と挽歌とのメカニズムをかさねて、羈旅歌がひろがつている。心中物に道行をとまなりことも、形成工程がまるで均一だからである。「古今集」巻8は離別歌だが、

一 君が行く越の白山しらねどもゆき(行・雪)のまにまにあとはたづねむ (兼輔集・日本古典文学大系本「大和物語」75段)

万葉集の「古今相聞往来歌類」のうちに、「羈旅に思ひを発す歌」・「別れを悲しぶる歌」をみとめるだけで、中臣宅守・弟上娘子の相聞グループの座標軌跡に、一層の理解がふかまるであらう。

一 石の上 布留の尊は たわやめの まどひによりて 馬じもの 繩とりつけ 鹿猪じもの

弓矢かくみて おほぎみの 命かしこみ 天離る 夷べにまかる ふるごろも まつちの
山ゆ かへり来ぬかも （『万葉集』巻6の1019）

「石上乙磨卿の土佐の国に配さえしときの歌…」という、題詞をかかげる叙事詩派の組歌群唱であるが、この題詞も編輯にもなつて後人がつけたものである。いま題詞どおりによみとると、長歌3首・短歌1首というわけだが、5首としてもかぞえたりしている（仙覚→国歌大観）。それほど原型を逸して毀損した作品形象をもつ。巻6へとりこむタイミングでさえ、もう古典化していたからである。「懐風藻」に乙磨の五言4首をとどめてその「序」に詠う。

- 一 …人才穎秀，雍容閑雅にして，はなはだ風儀によし，志を典墳につとむといへども，またすこぶる篇翰を愛す。かつて朝誦ありて，南荒に飄寓す。淵にのぞみ沢にさまよひ，心を文藻に写す。つひに＜銜悲藻＞兩卷あり。いま世につたはる。…

けれども「銜悲藻」があるところを聴かない。ときにのこる五言4首ともども、「遼夏千里に遊び…」・「余はふくむ南裔の怨み…」・「萬里風塵別なり…」・「他郷しきりに夜夢む…」ではじまる。いま万葉集の乙磨詞華抄には、主格も人称にも矛盾がある。なによりもまず「石の上布留の尊」は、乙磨の自称法ではない。神樂歌「石の上ふるや男」とひとしく三人称、石上地区の布留ということが「石上布留」である。石上（物部支族）氏の鎮魂咒術の実修用語から地名化している。

- 一 石上布留の山なる杉原の… （『万葉集』巻3の422）
- 一 しきしまの やまとの国の 石上 振の里に 紐とかず まろ寝をすれば…（…巻9の1787）
- 一 わぎもこや吾を忘らすな石上袖振河の絶えむと思へや （… 巻12の3013）
- 一 石上ふるとも雨に障らめや妹に逢はむといひてしものを （巻4の664・拾遺集巻12の765・古今六帖1・二八要抄）
あはむと妹に・綺語抄
- 一 石の上 布留をすぎて…泣きそぼちゆくも 影媛あはれ （仁賢紀）

転じて同音の降る・振る・旧る・狂る・触るにも、枕詞としてかかつてゆく。石上の布留の神宮はにぎはやびのみことをいつきまつる。にぎはやびは大和の国つ霊の名、これを神格化したのがにぎはやびのみことである。地縁から血縁を順序化させて一地方神をその神人が祖神化し、石上氏が祖神と仰ぐにいたつたものである。神武紀に石上の鎮魂咒術と皇室との交渉をめぐつて一部曲の起原を説く。垂仁紀では石上神宮の神宝の管理職に、物部連があずかる経緯を明かにする。

- 一 石上振の神杉神びにしわれやさらさら恋に逢ひにける（『万葉集』巻10の1927）
神さびて・古今六帖6
- 一 石上布留の神杉神さびし恋をもわれはさらにするかも （… 巻11の2417）
- 一 石上布留の神杉ふりぬれど色にはいはずつゆもしくれも （『新古今集』巻11の1028・秋篠月清集）
- 一 石上布留のわさだのほにはいはず心のうちに恋ふるこのごろ（『万葉集』巻9の1768・柿本集・恋やわたらん・新古今集巻11・993）
古今六帖5・二八要抄）

石上布留の神は「延喜式」巻9 神名上にみえる、大和国山辺郡の「石上=座、布留、御魂、神、社」（天理市布留）のつるぎ、これについて「袖中抄」巻13には、あるエポックの伝承生態をしるす。

- 一 昔、女の、河のはたに布をあらひてたてりけるに、河上より剣のながれきけるが、よろづのものをみな、きりやぶりてきけるに、この布にまつはれて、とどまりにけり。その剣をとりて、この社にいふによりて、布留とは布にとどまる、とはかけなりとぞ、うけたまはる。

布留の地名にちなむ民間語原説をふまえて、本質は三輪山聖婚譚型につらなる。この女は「棚機つ女」だつた古典印象をただよわす。だからこのつるぎは、「山城国風土記逸文」の加茂の社の丹塗りの矢、つづいて「出雲国風土記」の加賀の郷の金弓もかよう。神楽歌に「石上ふるやをとめ…」という、流布本をともなう局面もわかるであろう（「拾遺集」巻10の582）。「枕草子」でとりあげている、「歌は風俗、なかにも<杉立てる門>」は、

- 一 わが庵は三輪の山もと恋しくはとぶらひ来ませ杉立てる門（「古今集」巻18の982・「新撰和歌」4→謡曲「三輪」・耀天記・隣女晤言巻2・孝経倭漫筆巻1）
宿・古今六帖2・古来風鉢抄下 とふとふ・古今六帖6

これとこのパリエイションの羈旅歌「初瀬山ゆふこえくれて宿とへば三輪の桧原に秋かぜぞふく」（「新古今集」巻10の966）とを、むすびつらねて散文にうつしてゆくのが謡曲「浮舟」の「…初瀬山、ゆふこえ暮れし宿もはや、…桧山の外に三輪の山、しるしの杉も立ちわかれ、あらしとともに楯の葉の…宇治の里にもつきにけり」。それから「梁塵秘抄」2句神歌には謡物化して、

- 一 恋ひしくはとうとうおはせわが宿は大和なる三輪の山もと杉立てる門

「栄花物語」はつ花の章にも、「三輪の山もとうたひて、御遊さまかはりたれど…」というのは、「紫式部日記」のルポルターージュを下染めにしている。

- 一 恋ひしくは来ても見よかしちはやふる神のいさむる道ならなくに

（「伊勢物語」・「和泉式部日記」・「続千載集」巻13の1401）

「ちはやふる」が枕詞定着にいたるアプローチとして、石上布留の神の Eponym（名祖）を思はなければならぬ。いそのかみふるのみことの神性象徴からの意義分化をへて、い（う）ちはやふるの一般命題となつたものである。「俊頼口伝」には<三輪明神御歌>をあげて、

- 一 恋ひしくはともらひ来ませちはやふる三輪の山もと杉立てる森

これ三輪の明神、住吉の明神へたてまつらせたまへる歌、とぞいひつたへたる。

またさらに「袖中抄」で、古今集の「わが庵は三輪の山もと…」をひいて、

- 一 この歌を本にて、しるしのすぎいふことをば、よみならはしたるにそ。あるひは三輪の明神、すみよしの明神のおほんもとへ、かよひたまひけるあひだに、
すみよしのきしもせざらんものゆゑにねたくやひとにつまといはれん
とよみたまへる歌をば、拾遺抄には、「この歌、住吉の神の御託宣」とししたれば、三輪はをとこ神にておはしますときこゆ。すみよしは女神ときこゆ。

するとこれが「拾遺集」神楽歌、

- 一 住吉のきしもせざらむものゆゑに妬くや人に待つといはれむ

ある人のいはく、住吉の明神の託宣とぞ。

（巻10の587→「袋草紙」・「詞林采葉抄」2・「歌林良材集」下・「和歌具竹集」9→曲舞「由良物狂」

というのにはつきり照応してゆく。きしは「岸」と「来し」、ねたくで「妬く」と「寝欲く」、まつに「松」と「待つ」の縁語・懸詞が、纏絡して綾なす恋うたである。巫女の霊乞いうたから住吉明神の託宣へ、という理路のプロムナードをふむ。

仲平の朝臣、あひしりてはべりけるを、かれがたになりければ、父が大和の守にはべりけるもとへまかる、とてよみてつかはしける。伊勢

- 一 三輪の山いかにまち見む年ふともたづぬる人もあらじと思へば

（「古今集」巻15の780・「伊勢集」イ・は（金玉集）・「新撰和歌」4・「古今六帖」・入道大納言隆房卿「艶詞」・「歌林良材集」下…）

だがこの恋歌をめぐつて「頭註密勘」が、古今集の「わが庵は三輪の山もと恋ひしくは…」にまで、さかのぼつて別途の言語伝承をかきとめている。

- 一 …おほよそ三輪の山をたづね、またしるしの杉をよむ事、この歌よりおこれり。その根源は、ある書にいふ、「昔、伊勢の国奄芸の郡にはべりける人、深山にいでて鹿をまぢけるほどに、…これによりてその神の祭をば、伊勢の国奄芸の郡の人のおこなふなり。それよりしるしの杉とはいふなるべし。…」

「袖中抄」にひく「和歌童蒙抄」の本文のおもむきもかわらない。ほかにくしるしの杉>について「和歌具竹集」9に「みわのしるしの杉の事」。「歌林良材集」下で「有由緒歌一三輪のしるしの杉の事」を録している。謡曲「三輪」と同系列の狂言「伊文字」には、

- 一 恋ひしくはたづねて来ませい伊勢の国伊勢寺もとにすむぞわらはは
イ・問うてもきたれ

「頭註密勘」とか「袖中抄」とかがつたえるような説話法が、「信太一條田・信田一の森の葛の葉狐」へつながらぬ媒質になる。「禪竹文正応仁記」の上の命婦の尾薄明神の本地は聖天で、「これすなはち伊勢にてまします」とかたる条が、そういう図像形成を解きあかす鍵のひとつであろう。それも役霊史に即して石上氏から秦氏へ、ついには茶吉尼天の功德を唱導した東寺眞言の天部呪法と、習合複融してゆく操作プログラムが、とくにかえりみられなければならない。とにかくこの系譜をたどる歌物語は、すべて終局が破綻をつけている。異類求婚譚をつらぬく悲恋のステレオタイプである。

石上乙磨組歌の前半部は、乙磨を三人称あつかいにして、「石の上布留の尊は…」・「…わが背の君を…」という。神代記の八千矛の神の相聞組曲が、「八千矛の神の命は…」とうたいおこす、詠風とも恒等式に属する。八千矛の神の恋愛譚詩は、分類名が「神語」である。

- 一 …いしたふや あまはせづかい ことのかりごとを こをば

雄略記の天皇・皇后・三重の采女の唱和、「この三つの歌は、天語歌なり」とするす相聞構造の各末尾にも、「…ことのかりごとをこをば」とエビグラムを付す。してみると「神語」は、<神語歌>の後置修飾格の脱落でなければならない。譚詩曲をさらに伝説化させて、神代巻へ導入編輯したのである。それさえもこういう遺存のしかた以前、数次におよぶパリエーションを、へていることはいうまでもない。小歌（→風俗・国風）でなくて大歌として、雑謡としてよりも雅曲として、雅楽寮（→大歌所）の舞楽詞章だつた（橘守部「難古事記伝」・「長歌撰格」）。神語歌も天語歌にしても、天（海）馳使→天（海）語部の所管にかかる。この宰領家が「海語連」（続日本紀）・「天語連」（新撰姓氏録）である。八千矛の神の命物語が大歌なら、石の上布留の尊物語はその近代版として、遊芸伶人の小歌がつづる演劇脚本だつた。「たわやめのまどひ」を主題とした時世粧である。すると同類項だつたものが、どれほど湮滅し去つたことか、推測はすこぶる可能であろう。かの木梨の軽の太子物語一同母妹軽の大女郎との近親婚一で、志良宜歌・夷振の上歌・宮人振・天田振・夷振の片下・読歌とつらねてゆく歌劇も、偶然に文献化されてのこつた頭著のうち、とりわけ好典型をしめすにちがない。だが記紀すでに繁簡はもちろん、校合してみると伝承内容がちぐはぐしている。たとえば古事記には、軽の太子を伊予へ流す、というのに日本紀で、太子は儲君だから、罪することができないとして、軽の大娘の皇女を伊予に放つ、と説いてあるように。そこでむしろ事後の進行もちがっている。軽の大娘は允恭天皇の皇女、母が忍坂大中姫皇后で「またの名を衣通郎女」という（記）。べつに忍坂大中姫皇后の妹で「また名

づけて弟姫」も、衣通郎女とよぶのである（紀）。同母血族の性交渉は、漢字にあてて「姪」の範疇にあたる。だから万葉集巻2の左註には、「親々相姪」とかく（90）。これを「罪」としてさばきわけけることは、政教未分だつた古神道のためにはなかつた。妹（姉）が最高巫女としてまつりにつかえ、みこともちとしてうけとつて兄（弟）が、まつりごとへうつしてきて実践化につとめる。結果の可否をつぶさに妹（姉）が、中務（→中宮・中皇命）として覆奏する。というような循環方式のはこびに、古神道をつらぬく規範がある。兄（弟）と妹（姉）とのまぐはいは、御床・神牀・神座の秘蹟機密として、聖母子譚をさそう。この場面で膚接していく兄（弟）が、をとこ神としての二重構造をもつてふるまう。玉依彦・玉依姫の対偶にある。神代巻でイザナギノミコト・イザナミノミコトと、アマテラスオホホカミ・スサノヲノミコトとに検証があろう。儒・仏の東漸にさきだつ神統譜・皇統譜、すべてそういう秩序にもとづく。したがつて軽太子・大郎女の一件にくだした醜聞認定は、不倫とか背徳どころか綱紀違反として、とりあつかわれてくるゆきがあり、やはり社会通念の変革にもなつて、年代誌的にも新時期にはいつてきている。ずつとくだつて歌舞妓狂言になると、「東海道四谷怪談」で直助権兵衛お袖、「三人吉三廓初買」の十三郎おとせのように兄妹姦の悲劇をいろいろ。これは鶴屋南北それに河竹黙阿弥が綾なす、耽美というより露悪がかつた演出感覚から、因果応報律でとりさばいてみせるのだが。

兄姫にして嫡后→正妻にあたる忍坂大中姫命から、うわなりねたみにあう弟姫の衣通郎女なら、八千矛の神とスセリヒメと三角関係にいるヌナカハヒメ、仁徳天皇と磐媛とのあいだにたつ八田の若郎女一仁徳天皇の庶妹一とも、まるでトポロジーはひとつにあてはまる。それにしても軽太子物語とは、かかわりあう要因をもたない。允恭天皇の御名代部として飛鳥部、忍坂大中姫には刑部をさだめ、弟姫の衣通郎女に対して藤原部をつくる。仁徳天皇のために雀部をもうけ、磐媛のが葛城部といわれ、八田の若郎女のを八田部（矢田部一旧事記）と称している。軽太子のは軽部である。軽の大郎女の衣通郎女と弟姫の衣通郎女との伝承区別は、つまり軽部と藤原部との職掌責任がちがつていたから。

- 一 こもりくの 泊瀬の山の 大峽には 幡はりだて… なかさだめる 思ひ妻あはれ…のちもとりみる 思ひ妻あはれ
- 一 こもりくの 泊瀬の川の 上つ瀬に 斎杖をうち … 眞玉なす あが思ふ妹 鏡なす あが思ふ妻 ありといはばこそに 家にも行かぬ 国をも偲はぬ （允恭記）

「このふた歌は読歌なり」という、よみうたの成立も本質も葬送儀礼歌にある。メカニズムは恋妻・国偲びをもつて回転軸とする。斎場（ゆにわ・いつきのにわ）の矚目諷物法は、祭具をよみあげ葬器をかぞえたててゆく。よみうたは算歌・頌詞におさまるまで黄泉歌だつた。「君が行きけ長くなりぬ…」（「万葉集」巻2）もよみうた、「け」をよむことがけよみ、これからこよみ（暦）となる。だから「…相みねば月日よみつつ妹待つらむぞ」（「万葉集」巻17の3982）・「…朝寝髪 かきもけづらず いでて来し 月日よみつつ…」（巻18の4101）・「…わかかきさの 妻をもまかず あらたまの 月日よみつつ…」（巻20の4331）という修辭も可能であろう。月読の運行をもつて推計学風に、大陰暦の体系基準をつくる。と同時によみが死の国→常世の国につながつて、ツキヨミノミコトの冥界行一神さり・雲がくれ一をものがたる。読歌の「…槻弓 臥やる臥やりも 梓弓 起り起りも…」の槻弓も、副意識につきよみをかぶせている。山たづねの靈迎え方式をうたうところから、降神招魂の咒具としての槻弓を表面化させてくる。すると槻弓から梓弓へは、ひとつづきの慣用発想法である。つづいて「まつ」→まちは、うらない・まじないの術

語である。出現・啓示をしきりにねがうことが、「こふ」→こいである。まちはまつりの意味をさえふくむ（庚申まち・二十三夜まち）。

- 一 こもりくの 泊瀬の川の 上つ瀬に 斎枕をうち… 眞玉なす わが思ふ妹も 鏡なす わが思ふ妹も ありといはばこそ 国にも 家にも行かめ 誰がゆゑ行かむ（「万葉集」巻13の3263）

古事記を検ふるにいはく、件の歌は、木梨の軽太子のみづから 身まかりしときにつくる、といへり。
反歌

- 一 年わたるまでも人はありといふをいつの間にそもわが恋ひにける （… 3264）

ある書の反歌にいはく、

- 一 世間を倦しと思ひて家出せしわれや何にか還りて成らむ （… 3265）

伝承をかさねてくる途次で、反歌をあわせてきたようである。葬送儀礼歌→挽歌→哀傷歌が、相聞→恋歌にうつりかわる工程をつぶさにみせている。とくに「年わたるまでも…いつの間にそも…」は、けよみうたの性格がめだつ。ここで注目し値する問題と件がある。万葉集で古事記とテキスト校合をくりかえしている作品は、転太子物語をめぐるグループにかぎられている。ということは要するに、万葉集形成史とも内部交渉をもつ、ことがらにちがいない。古事記のよみうた一死霊讃歎曲→算歌・嘉歌一が、万葉集の相聞に編みこまれてゆく楔点をうがちながら、やがてよみうたは二序にわかればじめて、死との関係をたどるのは挽歌へ、生の方向にふかまるのが相聞へ。これから思国（→家・妻）歌をへて、「琴歌譜」にのせるようなよみうたをさそう。こういうよみうたになると、思国歌に国見歌がかさなつてきている。それに「大君を 島にはふらば…」の夷振の片下も、「天飛ぶ 鳥も使ぞ…わが名問はさね」の天田振にしても、蘇生を「うけひまち」、復活を「むかへこふ」、たまふりうた（鎮魂歌）・たまよばいうたから、かむはふりうた（葬送歌）にうつされている。古事記には組曲にまとめて、配流者の羈旅歌に応用をこころみている。「葬る」は「放る」ことだつたから。霊を「とむ」（尋・覓・求）ゆかりに「とむらふ」（訪・弔）→「とぶらふ」。このとむなら「とふ」・「まく」・「たづぬ」にかよう。よみうたは相聞とも挽歌としても、あつかわれていた例示ができる。

- 一 せむすべの たづきを知らに 石が根の ござしき道を 岩床の 根延へる門を…思ひつ
つ わが寝る夜らを よみもあへむかも （「万葉集」巻13の3274→3329）

反歌

ひとり寝る夜をかぞへむと思へども恋のしげきに情利もなし （… 3275）

巻13で部門ごとにふたところ、それぞれのところにだしてある。ただ相聞は反歌をともなつて、挽歌がそれをもたぬだけである。だが挽歌にはこの長歌構成の前半位がある。そこでつぎにあげる大伴家持の作品、「たちまちに枉疾にしづみ、ほとほとに泉路にのぞむ。よりにて歌詞をつくりて、悲緒をのぶる一首」は、状況証明に委曲をつくしているものだが、「…年月も いくらもあらぬに …うつせみの 世の人なれば うちなびき 床にこいふし 痛けくし 日にけにまさる …妻のみことも 明けくれば 門によりたち …夕されば …黒髪しきて いつしかと 嘆かすらむそ …せむすべの たづきを知らに かくしてや 荒し男すらに 嘆きふせらむ」（「万葉集」巻17の3962）、とたたみこめてゆく発想法に徴してみても、まつたく誄詞要素をつきぬけていであろうか。さらに石上乙麻呂相聞にうたうもの、

- 一 大君の みことかしこみ …いでますや わが背の君を かけまくも ゆゆしかしこし

住吉の 現人神 …荒き波 風にあはせず …すみやけく かへしたまはね 本の国辺に
すみのえ (「万葉集」巻6の1020-1021)

これと構造も均質であつて、修辭にしても等価の作品は、「天平5年に、入唐使に贈る歌1首」(作主詳らかならず)である。

一 …日の入る国に つかはさる わが背の君を かけまくの ゆゆしかしこき 住吉の わ
 が大御神 …荒き風 波にあはせず たひらけく 率てかへりませ 本の国家に
る みかど
 (「万葉集」巻19の4245)

なるほどどうかえる細部の参差のところには、わずかながら創作機能がほのめいている。それにしても海路航行に際してよみあげる、定型の寿詞ことばごのほかのものではない。「父公に われは真
 名子ぞ 妣刀自に われは愛兒ぞ…」というけれど、乙麻呂の父の麻呂とするなら、さきに養老
 元年に薨じている(「続日本紀」)。「妣」の字は歿後の母をさすから、乙麻呂の年齢にあてると妥当
 をかく。まして「母父に 真名子にかあらむ」(「万葉集」巻13の3336)・「母父の 愛子にもあらむ」
 (… 3337)とも、挽歌によまれている通俗技法にすぎない。「大崎の神の小浜は狭けども…」
せは
 にしても、

一 大崎の荒磯のわたり延ふ葛のゆくへもなくや恋ひわたりなむ (「万葉集」巻12の3072)

ともうたわれている大崎一和歌山県海草郡下津町大崎一での現地詠のようにもみえ、またここが土佐への渡津だつた風についているが、そういうアクチュアリズムはとにかく、洋上進航をい
 わう咒歌としての類型表白から、さしてあまりでていないものである。それはそれとしてこうい
 う場所が「神の渡」である(「万葉集」巻13の3335・3339)。

一 ちはやぶる鐘の岬をすぎぬともわれは忘れじ志賀のすめ神 (「万葉集」巻7の1230)

一 …たひらけく 親はいまさね つつみなく 妻はまたせと 住吉の あがすめ神に 幣ま
すみのえ ぬる
 つり 祈り申して… (… 巻20の4408)

海神に唱えかけてみたまのふゆ(恩頼)をこいいのる儀礼歌、ときには羈旅の宴遊歌でさえも
 ある。

「石上乙麻呂卿の土佐国に配さえしときの歌」につながる座標軸が、しだいに海辺漂泊の哀傷
 歌を展開させて、

一 わたのはら八十島かけて漕ぎいでぬと人にはつげよ海人の釣船

(小野篁一「古今集」巻9の407・「新撰和歌」・「金玉集」・「新撰髓脳」・「今昔物語」巻24の45・「古
 来風躰抄」下・「前々大平記」巻12…)

一 ほのぼのと明石の浦の朝露に島がくれゆく船をしぞおもふ

(「古今集」巻9の409・「新撰和歌」・「古今六帖」3・柿本集下・「三十六歌仙」・「金玉集」・「今昔
 物語」巻24の45・「古来風躰抄」下・「袖中抄」12・安斎隨筆・「卯花園漫録」巻1…)

一 わくらはにとふ人あらば須磨の浦に藻塩たれつつわぶと答へよ

(在原行平一「古今集」巻18の962・「新撰和歌」3・「古今六帖」3・「興義抄」巻7・「撰集抄」・「歌
 林良材集」上…)

というような百花斎放をさそう。ことに行平の「わくらはに…」が、「源氏物語」の須磨の巻
 制作へのモメントになる。人に知られないでゆきつづける羈旅の寂寞感が、瞑想・諦観の歌境を
 くりひろげてくる。ともするとまた羈旅歌に相聞構造をたもつわけは、愛人の靈魂をたがいにわ
 けあわせて、もちあるいていた咒術実修から、けれどもめだつほど乙麻呂配流詠には、宅守・娘
 子の唱和風のプロットはない。「雑歌」としてあつめられた理由であろう。だが巻6へ導入にさ

きだつプログラムはどうだつたか、たしかにもとこの連珠組歌は、乙麻呂を貴種漂泊綺譚の主人公になぞらい、情史をいろどる仮託人物として、遊芸伶人の演出意欲をそそつた、潤色物の断篇たちがいない。

一 石上朝臣乙麻呂 座_レ筵_ニ久米連若売_一 配_ニ土佐国_一 若売配_ニ下総国_一焉。

「続日本紀」で天平11年3月の条にとどめてあるのに、万葉集には天平10年の項におさめている。ふたつの文献のちくはくにしても、問題処理に資するシグナルとなるであろう。

石上大夫の歌1首

一 大船に真梶_{まがしほ}繁貫_{しほ}き大君のみことか_しこみ磯廻_{いそま}するかも （「万葉集」巻3の368）

右は、いま案ふるに、石上朝臣乙麻呂、越前の国主に任_まげらゆ。けだしこの大夫か、

和ふる歌1首

一 ものふの臣の壮士は_{おみ}大君の任_まのまにまに聞くと_ないふものそ （… 369）

右は、作者いまだ審らかならず、ただし笠朝臣金村の歌の中にいづ。

左註にかかっていることがらは、題詞に対する巻3の編者の校訂設問である。でも乙麻呂が越前の国主として赴任した事実認証は、ここの覚書をのぞいてどこにも、ほかに照合できる史料がみえない。もし左註に即して仮りに乙麻呂の歌とするなら、土佐流離の時詠ともかよう修辭法に気づく。それから「笠朝臣金村の歌の中にいづ」というのは、べつに「笠朝臣金村の歌集にいづ」（巻2の232の左…）とあるのと、底本としてひとしいものをさすのにちがいない。石上大夫の「大船に真梶繁貫き…」は、編輯順序がひとつさきの「角鹿津にして船に乗るとき、笠朝臣金村の作る歌」の、「…大船に真梶ぬきおろし…あへきつつ わが漕ぎ行けば…」、とかわらないであろう。それが越前の国府の武生へむかうよすがのうた。ことに武生には宅守の寄寓の味真野が…。

一 …石上乙麻呂…中臣宅守…不在赦限。（「続日本紀」天平12年6月15日の条）

石上大夫の歌に「和ふる歌」は、乙麻呂のあるじまうけにつどい、「垣下の座」にはべる金村の諷唱であろう。石上大夫は敬意を表して名をしるさなかつたのである（「万葉集全註釈」）。

石上乙麻呂朝臣の歌1首

一 雨ふらば着むと思へる笠の山人には着せしめ濡れはひづとも （「万葉集」巻3の374）

「笠の山」は三笠の山ともいうし、また奈良県磯城郡上之郷村笠の山ともきく。どちらにしても朗吟された宴席歌である。乙麻呂作品抄から彷徨・漂泊・巡歴の感懐ばかり、印象づけられる構造形成もふしぎである。ゆるされて乙麻呂はかへり、天平勝宝元年には中納言ののぼり、翌2年（750）9月1日薨じている。「竹取物語」の中納言石上のまろたり一伝本によつてまろたか・まろだだ・もろたり・もろたか一には、乙麻呂の戯曲化をふくむかもしれない。そうするとかぐや姫への悲恋は、土佐遠流一件のプライベートを、副意識に綾なしてあるわけになる。

2 「艶容女舞衣」前後 一 酒屋の段の序列一

一 浄りの文句、みな実事を有りのまゝにうつすうちに、また芸になりて実事になきことあり。…芸といふものは、実と虚との皮膜の間にあるものなり。…虚にして虚にあらず実にして実にあらず。この間に慰みが有たものなり。（「難波土産」）

元禄8年（1695）12月7日（6日の夜）、大阪の下難波村の千日墓所南側の石垣の下字さいたら畑で、大阪長町四丁目の美濃屋平左衛門の養女おさん事・芸名三勝と、大和国五条新町の豆腐屋

赤根屋半七との心中事件（「元禄宝永珍話」・「菘笠雨談」・「伝奇作書」etc.）があつて、いち
はやく翌9年正月2日から大阪の岩井半四郎座で、「日本鐘馗大臣」の付狂言にして「茜の色揚」
と題し、花井あづまの三勝・杉山勘左衛門の半七で上演され、150日連続の大あたりをとつた。

その割書には、「御評判の心中、付り二世まで結ぶ上がへのつま」とみえるようにこういう際
物を舞台にあてこむことに、興行価値を計量していたころである。現に元禄15年版の浮世草子、
都の錦の「元禄曾我物語」で、

一 人色過ぎた証抱には遊女の心中、日に日に絶ゆることなし。三勝が時分には、珍らしさの
まゝ狂言にもせり。…

ひとつころそそる相対死をとりあつかつた、めざましい先駆作品でもあつたのだが、これは口
立狂言にすぎなかつた。

一 秋月信女は三勝が法名、嵐雪信士は半七なり。元禄のころの心中にて、墓は大阪千日寺に
建てる。三勝が紋は三階松、半七が紋はひとつ巴なり。三勝はみのやの抱へにして、舞子
の見せ内はかさやなり。ゆゑに「かさや三勝」といふ。

また笠や三かつは、寛文のころ歌舞妓の役者なり。すでに商人あかねや半七と心中せし
といふ。元禄八年十二月六日、石塔にあるは秋月・嵐雪といふこと、千日法善寺にしるし
を残す。（「三升屋二三治戯場書留」上巻）

歌祭文の「笠屋三勝千日寺心中」、それから事件後に9年をへて、宝永元年刊行の「落葉集」に
のる蔦山四郎兵衛作「三勝心中」も、歌謡界に流行したものである。地唄の本調子・房崎勾当調
住吉屋某作を、前広橋勾当が弾きはやらせたのを、世に「広橋の三勝」という、当時の都音頭に
原典があるようである。のこつている浮世草子では、元禄11年上梓の西沢一鳳の「新色五巻書」
巻2・「心中あかねの染衣」が、まずふるいものの部に属する。のちほど三勝半七心中を仕組ん
だ歌謡・小説・戯曲の総称も、「三勝半七」で通つている。三勝半七文芸のうちことに有名なの
は、義太夫節の「艶容女舞衣」である。この題名のもとづくところは、下の巻のむすびによるの
であらう。

一 …花も実もある桜井のおきて和らく国の名も、大和五条の茜染、いま色あげし艶容、その
三勝が言の葉を、ここにうつして女舞、袖も豊に竹の春、ただ安らかに永き代の、尽きせ
ぬほどこそめでたけれ。

安永元年（1772）12月26日、豊竹定吉座の初演とするす。竹本三郎兵衛・豊竹応律・八民平七
等作者連名のチームワークである。これにさきだつ作品は、延享三年（1746）10月21日、道頓堀
の陸竹小和泉座初演の「浮世茜染五十年忌女舞劍紅楓」で、作者が春草堂だつた。さらにこの新
版は、明和元年（1764）8月4日京の扇谷豊前掾座初演、「浪花の地染洛陽の潤色増補女舞劍紅
葉（楓）」である。だが五十年忌興行にいたるまでには、すでに紀海音作にかかる、豊竹座の「笠
屋三勝二十五年忌」がある。「明和板外題年鑑」で宝永6年（1709）8月23日から、豊竹座上場
を記録するが、「南水漫遊」が享保元年（1716）初演説をうちだしている。ときに二十五年忌と
いう時限設定に、焦点をおいてみると享保4年（1719）になる。すると外題で「笠原三勝…」と
うたうところに、ひとまず問題楔子がひそむであらう。

一 按ずるに、いにしへ女舞といひしは、まつたく白拍子のことにて、末代の大頭なり。笠屋
三勝・桐屋大蔵などいふ女人、水干に袴・平常にて、中啓をもつて猿楽の用ゆる太鼓の頭
ばかりを、うちかけうちかけ平家物語等を唱歌にして、扇をさしかけ舞ふ。今様慶長のこ
ろより一変して、京にて舞子、江戸にて躍子といふ…。（燕石十種本「墨水箱夏録」巻二）

美濃屋の抱え遊女の三勝の二十五回忌興行としても、「笠屋…」をいう条理がつかない。まして歌舞妓脚本の「三勝二世つまむすび」の角書が、「五十年忌血汐茜染」となっているので、五十年忌の三勝半七狂言と思惟されやすいが、元文5年(1740)の夏に大阪芳沢あやめ座所演、並木笛風・中田万助らの合作というから、まるで年代がずれてあわなくなってくる。だからこの25年忌・50年忌の時限設定は、美濃屋の遊女の死とすこしも関係がないことをしめす。美濃屋の遊女と笠屋三勝とは別人である。つまり笠屋三勝と名のる、女舞役者の何代目かの年忌法要を、25年とか50年とかにしたときの追善興行にあたる。笠屋三勝と美濃屋の三勝とのパーソナリティーが複融して、あらたな文芸的個性に創作されているわけである。女舞の舞姫で時空を異にしつつ、笠屋三勝の名で一貫されてゆく複数芸能人がいた。

義太夫節の一派の三勝節は、笠屋女舞からの展開である。すべてどの三勝半七物でも、三勝節系統の音曲芸能上のフィクションである。美濃屋抱えのおさんが、遊女として三勝節の弾手・語手・舞手でもあつたから、三勝といつたのにすぎないようである。もとより女舞がいつぼうでは、生活様式として遊女の概念にはまつていたのだから。享保から元文4年にかけてその曲風の禁止令がくだるまで、声華をきわめた宮古路豊後掾の正本「大和国茜染」があり、明和年中には「三勝恋の染本」が、宮園節として初代宮園鸞鳳軒によつて作曲され(宮園扇子所収)、これから清元節「造銃菊睦言」地唄繁太夫物(本調子広橋勾当調「三勝中の巻」となり、歌舞妓脚本には「台頭霞彩幕」(5幕14場…奈河篤助・二代桜田治助ら作、文化9年「1812」正月15日、江戸中村座初演)がある。それも「台頭緑色幕」(3幕…奈河亀助・奈河七五三助との合作、安永7年「1778」4月、大阪中の芝居初演で「三ッ柏茜色幕」・「女舞剣紅楓」などを粉本とした新作)を江戸の世界にうつして、曲亭馬琴の読本「三七全伝南柯夢」によつて脚色し直したものである。これと大同小異なのが「台頭緑色幕」で、しいていうと「台頭霞彩幕」の別題かともみられるが、安政3年(1856)8月大阪筑後芝居にかかっている。だが「台頭緑色幕」というのなら、天保5年(1834)3月に大阪中の芝居で所演をみている。

馬琴の「三七全伝南柯夢」(文化5年「1808」正月江戸初版、6巻7冊)は、じかに「艷容女舞衣」からヒントをえて、晋の「搜神記」に唐の「南柯記」とか、明の「南柯夢」などをアレンジしたもの。その「搜神記」巻3のエピソードが、「三国志演義」第78回では、ずつと敷衍されている。むしろ馬琴がこれをテキストにしたことは必定である。

「三七全伝…」刊行の年の9月、大阪中座で「舞扇南柯話」と題して歌舞妓へ。そこで好評にちなみ大阪の河内屋太助が正本を印行、また京都の大菱屋宗三郎・山科屋次七の合刻で、やがて「南柯話飛廻雙陸」ともなつた。この「三七全伝…」の続篇が、「古夢南柯後記」(文化8年発兌)である。下地に「枕中記」・「槐宮記」をかりている。これが弘化三年(1846)には、三代桜田治助らの脚色をへて「青砥稿」として、市村座上演されてゆく。馬琴の読本「青砥藤綱模稜案」の後集5巻5冊は、文化9年に刊行におよぶと、この劇化がおこなわれて文化11年8月には、大阪の角座上演の「定結納瓜櫛」。狂言作者は奈河晴助である。あけて12年正月には狂言の根本が、河内屋太助方から絵入りで出版され、「青砥藤綱模稜案」について流布した。のち文政3年にいたつて馬琴門の樂亭琴魚が、馬琴の校閲のもとに「青砥藤綱模稜案」になぞらい、「刀筆青砥石文」(一名「鸞水箴語」)6巻を綴つたのも、時好を追つたものといわなければならない。くだつて弘化3年7月27日からの市村座の「青砥稿」は、その角書に三七全伝南柯夢・新刻刀筆鸞水箴語・右衛門藤綱模稜案とならべているように、とどのつまり三者のつきまぜである。弘化4

年から嘉永2年まで6編つづきで、すこぶるうけた藤本吐蛟（狂言作者の三世瀬川如皐，馬道の狂言堂とも称したひと）の「勸善青砥劇譚」になると、もとの芝居台帳から合巻本じたてに、つくりかえたことはあきらかである。いままでは小説より脚色する順序だつたのが、これ以後は芝居台帳から小説へ方向軸をひらいたくらいである。嘉永元年（1848）に上梓の一筆庵主人（溪斎英泉）の「青陽石庁礎」初編も、（四編が柳下亭種員で、完結したのが嘉永五年），そういういちじるしいひとつにちがいない。この異称は「青砥譚」…。山東京伝が黄表紙にまとめた、「大平記
吾妻鑑玉磨青砥銭」（喜多川歌麿画）なら半世紀さかのぼつて寛政2年（1790）だつた。べつにそれから「青砥稿」が、二代河竹新七（黙阿弥）の手法にかかつて、「青砥稿花紅彩画」（弁天娘女男白波）へ。とかくするともう三勝半七物とは、類縁を絶つことももちろんである。人情本で溪斎英泉がさしえにまわつて、二世南仙笑楚満人（為永春水）の作「園雪三勝草紙」6冊がある（文政8年）。「三七全伝南柯夢」にもとづいているのが、天保6年（1835）の狂訓亭為永春水の人情本「貞烈美談園の花」とか、安政2年（1855）にでた楽亭西馬の合巻本「南柯夢女舞衣」とか。「三七…」の影響にうながされてまとめられた「台頭霞彩幕」の大切は、常盤津節の「其常盤津仇兼言」である。これから清元節にあらためて「造鉞菊陸言」。「寿三升曾我」の二番目長唄の「三勝道行」は、宝暦6年（1756）春の中村座初演の「三傘暁小袖」（上巻に三勝半七浮名の雨・中巻が梅川忠兵衛浮名の雪・下巻をおはつ徳兵衛浮名の霜）。新内の「三勝縁切」の本名題は「千日寺名残鐘」，海音の「笠屋三勝二十五年忌」から新内化されてきたもの。山東京山の合巻本「大晦日曙舩紙」（天保10年）の初編2篇にも、三勝半七説話がみえている。ほかにあげることのできる合巻本として、一亭五蘭の著作で喜多川月磨えがく「戻駕忠義操」3冊（文化8年），東西庵南北著・勝川春扇画の半紙本合巻「花曇笠屋連弾」6冊（文化8年），また緑亭可山著に歌川美丸画の「両個傘屋雨濡記」6冊（文化12年），式亭三馬著・歌川国貞画の「女戯時世粧」6冊（文化12年），東西庵南北のふで歌川豊国さしえ「蓑屋傘屋花雪降」6冊（文化12年），つづいて山東京山がかいて歌川国九画の「寝語女順礼」6冊（文政3年），柳亭種彦著・歌川国貞画の「娘狂言三勝話」6冊（文政4年刊→天保10年再摺），曲亭馬琴と一陽斎豊国とりあわせの「諸時雨紅葉合傘」6冊（文政6年），ふたたび山東京山著・五波亭国貞画の「夢合寝物語」6冊（文政6年），それに鶴屋南北したためて歌川国貞・貞斎泉晁ふたりさしえの「陸月深仲町」6冊（天保5年），墨春亭梅磨著に歌川国貞画の「花艳対之舞風流」4冊（天保8年），式亭三馬著・歌川国貞画の「三七女歌舞妓」3冊（出版年代不明）…。

一 さてつぎは隣の台頭，私と違ふて太夫が見事じや。まづ表には櫓を上げ，名に負ふ美濃屋三勝殿。仏御前の扇の手，それから静の鼓の段，源平八島壇の浦，須磨の浦には汐汲姿。

……

一 ゆく道の，地人足早き日暮前。ハルツいひ合はさねども祭文も，小坊主万歳・台頭。……老若貴賤くちぐちに思ひを色咄し合ひ。詞なんでも舞は一枚で，ほんに器量は二番とも，地三勝様にとどめたと，とりどり評判わいやわいや。わが家わが家フツへ五日の暮の宵月の，オクル光りがさすやたいまいの，櫛に照りそふよそほひも，舞台のまゝの薄化粧。楽屋口より三勝が，衣裳・小道具風呂敷に小オクリ送り迎ひか小綺麗に…

（「艶容女舞衣」・生玉の段）

この詞章によつても，台頭女舞のレパトリーの一部さえ，理解できるにちがいない。大（台）頭という芸能は，幸若舞（二人舞・曲（久世）舞・舞舞←舞曲）の系統に属して，いまでは福岡

県山門郡高瀬町大江に、伝承生態をとどめているだけ。ほぼ諸流儀の分派工程を、推測させるてがかりとして、「大頭舞之系図」をのこす。幸若舞の芸統をたぐるとき、ほかへ同化・融即したものの以外に、たしかに遺存と想定してよいのは、この筑後の大頭舞ばかりである。かつて桃井幸若丸の音曲が、崇光院御宇の貞和2年に天聴に達して、つぎの幸若弥次郎直義から幸若舞と称して一流をたて、直義の弟子の山本四郎左衛門直義におよんで大頭と号し、あらたに幸若舞の別派大頭舞がおこつたという。文献でもそういう経緯・脈絡をうかがわせるものがあつて、山科言継の天文年中の日記のなかにも、「…山本号ニ大頭…」とみえたとおりである。だから元禄年中の華頂山義山著「図光大師行状画図翼賛」で、

一 延年ノ舞ハ総ジテ舞楽ノ時、最初ニアル儀ナリ。霊払ナド云フニ同ジクシテ、悪鬼ヲ払ヒ魔障ヲ去ルノ一術ナリトゾ。

…ソノホカ楽・朗詠・白拍子・開口…風流・大頭・相乱拍子、面白キワザナリトゾ。…

延年舞の節曲舞からでた幸若舞のひとつに位置づけてある。ところが異説もあつて初代桃井直詮の子の幸若八郎直継の姉操の嫁した、越前の大野郡の郷土松田大和允が、大頭の祖ともいいつたえられていて、大頭左兵衛本にみえる大頭左兵衛とよぶのは、その人かとも推しあてていう。それから大江の山本四郎左衛門直義の弟子の笠屋三右衛門が、笠屋流初代にあたる芸統譜へつながつてゆく。幸若舞本流がそうだつたように、大頭舞・笠屋舞でも男舞と女舞との二様式をたもつ。馬琴の「著作堂一夕話」巻三には、

一 「事迹合考」といふものに、女舞は白拍子のことなり。慶長のころ、桐屋大蔵・笠屋三勝、女舞大頭の座元なり。…これは平家物語・盛衰記のおもむきを、うたひものにつくり、大鼓にあわせてこれをまふ。舞のいでたちは、天冠をいただき、狩衣をつけ、大口をはく。これを女舞大頭と名づく。この舞に、岩戸開・天地拍子・羅生門などという、伝授の舞ありしとぞ。

永禄のころ室町家より、禄給はりたる舞女に笠屋夏といふものあり。夏がこと、「室町殿物語」に見えたり。これ笠屋と名づくるのははじめか。その子孫に笠屋新勝・同万勝・同春勝などいふあり。みな寛文のころまでの女舞なり。三勝もこの門より出たる女にて、由緒あるものなり。歌舞伎狂言作者並木五瓶といふもの、三勝がいただきし天冠を、おさむるよしきけり。天明四年十一月桐長桐芝居興行免許のとき、「馬揃」とやらんいふ狂言をしたり。天冠・狩衣・大口のいでたちにて、大鼓一挺にてうたひまへり。これいにしへの女舞の遺風なるべし。三勝は宝永のころ、すでに老女にて京に住せしといふ。この一条、醒世子の説なり。

笠屋夏をモデルに副人物として小説化したのが、著作堂簀笠翁の「三七全伝南柯夢」である。だが「著作堂一夕話」よりも考証価値をもつのは、為永一蝶の「歌舞妓事始」にちがいない。その「女舞之事并大頭起付三勝弁惑」の条、

一 そもそも女舞といへるは、二代目の国女が弟子に、柏木といひしもの、一舞を工夫し、小鼓なしに大鼓を用ひ、諷ひものも、元祖於国が作りし神歌の変風をやめ、平家物語・源平盛衰記の事跡を文句に綴り、大つづみに合せたり。よつて大頭といへること、これよりいひはじめたり。装束は天冠に狩衣。大口にてまふ。すべて女舞には、簡条あまたありて、岩戸開…天地拍子、または羅生門などいふ、伝授の舞あり。またむかしより伝ふる舞に、楽拍子舞といふものあり。かつら舞といへるものあり。これは上梵の月宮月の宮人の舞ひたまひし、霓裳羽衣の曲の舞なり。また鼓歌といふものあり。すべて大つづみを用ゆ。さ

て寛文年中より、御赦免あるところの名代、ここに記す。

一、男舞名代 笠屋新太夫

室町殿の御時の御扶持人、笠屋なつ子孫新勝といふものの一子三郎兵衛、寛文六年名代御赦免あり。三郎兵衛が先妻を万勝といひ、三郎兵衛が娘を春勝といひ、後妻せんといひしをのちに新勝といへり。それより姪さつといふものへゆづり、すなはち新勝とあらため、それよりつやといふものへゆづる。正徳年中に、宮地芝居御停止となり、享保元年四条にて、のちの新勝、前芸唐子をどりをしてのち、女舞のわざをなし、兩年つとめたりしに、女芸を禁じまたひ、享保十六年九月廿三日新太夫とあらたまり、元文二年閏十一月、のちの新太夫ゆづりうけ、またいまの新太夫へわたりしなり。

- 一、女舞大頭 柏木
- 一、同断 笠屋三かつ
- 一、同断 よしかつ
- 一、同断 たちやくに
- 一、仕形男舞 舞 又太夫
- 一、同断 丹波

右六株はいま絶えたるもあり、当地に居住なきもあり。延享年中、一勝といふもの、大坂にて大頭を催したり。また前かた大坂にて、浄瑠璃小歌にうたひし、半七に馴染たる三勝といふもの、この株の内なりといへるは、大なる誤なり。それは箕屋三かつといひしものなり。

笠屋女舞史上で<三勝>が占める名題軌跡は、きわめて枢要のものである。ことにその<三>というのも、流祖笠屋三右衛門にもとづくにちがいない。「醒醉笑」巻1の「落書」の条で、

- 一 大頭勸進舞のわきに笠屋、つれに池淵といふ者なりしが、折節わるう雨ふりし。「雨ふらば笠屋をきせよ大がしらこもかしこも池淵となる」

とにかく系図という構造体系は、数次の世代を来歴してのちに、計画記録として成立をみる。とくにそれが芸能史をかたちづくりながら、相伝の關係と血族の層累とが、かなり混乱しているうたがひがある、とみとめなければならないとき、まして家格にまつわる芸統至上主義のもとで、壯蔽化をへているような場合だと、にわかには判定はみちびかれにくい。それで幸若舞の家譜に徴してみても、やはり例外というわけではない。できるだけ家譜にからめた状況分析をさけてゆくが、ただ幸若舞系統の女舞には、ほかにもう一派の活動をみのがしてはならない。というのは桐座をさしている。座としては寛文元年(1661)に、初代桐大蔵が江戸木挽町五丁目に、劇場を設けてから一種の結集をとげたときとみていいのだが、越前の幸若小八郎の高弟幸若与太夫(伊豆国大湯村住)の後裔・第五代重右衛門の女が初代桐長桐で、寛永年間に江戸をはじめ販東諸処を巡業し、関東十八座の座元となつて興行権をえている。この初代桐長桐の孫娘板桐の女が桐大内蔵である。慶安年中に江戸の神田・中橋・堺町あたりを巡業し、寛文元年より桐座を自主経営して、もつぱら女舞を演じたという。その女が二代目を襲名している。だがしだいに桐座はすたれ、やがて再興はしてみたが、天明4年(1784)になつて市村座の控櫓におさまる。ついに明治16年からの桐座は、名目上のものにすぎない。それに市村座そのものが、昭和5年(1930)火災に罹つて焼失し、いまのところ廃座のかたちである。桐の紋所は筑後の大江に現存する、大頭の座の紋所でもあり、これが「幸若」の伝承路線を意味づけ、閥族のトーテミズムをかたどる。幸若八郎

九郎家系図の直詮の条に、

一 …参内シテ…奏ス。 寂感ノアマリ菊桐ノ御紋ヲ下賜、ヨコニイタリテ今、家紋トス、…

幸若舞が<双紙（草紙・草子）舞>とも称されている（「大頭舞之系図」直信の条・「幸若八郎九郎家系図」）のは、幸若舞曲の詞章を<舞の本>といつて、それにはお伽草紙（草子）が充当されたりしたので、使用台本にちなむよびかたからだつた。

「艷容女舞衣」は3巻6段もの、上の巻が生玉の段・嶋之内茶屋の段で、中の巻を新町橋の段・長町の段にわけ、下の巻は今宮戎の段・上塩町の段をあてている。このプロット編成をみると、三勝半七物の要素なり局面なりをさぐつて、とりあつめてきたモンタージュ作品のほかのものではない。さきだつ作品史を制作年代順に位置づけてゆくと、どれでもその時限にささえられた特質をふくむばかりでなく、同時に前提条件ひとつひとつが、三勝半七物という系統発生の諸契機をうがつ。先蹤を基礎にして問題追求やら演出方法やらを通じて、つねに新規の展開をいざなう。最後に浄瑠璃操芝居の工程で、終止符をうつことになつたのが、つまり「艷容女舞衣」というわけである。でも昨今の舞台処理にいたつては、下の巻の上塩町の段がふつう「酒屋の段」とよばれて、しばしば所演をくりかえされるだけである。といつてもそれでさえもカットして、

一 ふるさとは大和五条に名のみして、いまは浪速の上塩町、格子づくりも小づくり、三輪の山本ならねども、杉立つ軒の酒ばやし、味淋・白酒・焼酎の、フシ看板もからい渡世なり。地色売場に居眠る丁稚の長太、酒壺で天窓こつつり、……

とかたりおこすとおりの演出によることも、ごくまれになつてちかごろはおもに、

一 入相の、ハルフ鐘にちりゆく花よりも、あたら盛りを独り寝の、お園をつれて翁親が、世間構はぬ十徳に、丸い天窓の光さへ、子ゆゑにくらむフシ黄昏どき、地あるじの妻は灯をともし、表をしめにいそいそと、出合ひ頭に、「ほほ これはこれは宗岸様。同そちらにゐやるはお園じゃないか。」「あい母様、おかはりもござりませぬか、…

とお園を主軸にするくだりよりはじまつてゆく。ことさら「艷容女舞衣」のこの酒屋の段になつて、お園の父で宗岸というわき人物が点描されるし、お通の守袋にはさめた三勝半七の書置をかせに、関係者が愁歎をふかめているところへ、三勝半七のふたり死へいそがなくてもいい、客観事態がともなつてくる、というような三つの趣向は、既成作品にはなかつたことである。けれども酒屋の段そのものなら、「女舞剣紅楓」の六段目「二つ井戸茜屋半兵衛借座敷の段」から転調させている。それにもつとさかのぼつて、「笠屋三勝二十五年忌」の上の巻「関の地藏の段」に、やはりモチーフがみえていのである。また宗岸と半兵衛との劇的対立は、近松門左衛門の「山崎与次兵衛寿の門松」中の巻、「山崎浄閑住家」で治部右衛門と浄閑とが、かみあう詰開きのシーンをなぞつた翻案である。「今ごろは半七さん、…去年の秋のわづらひに…」というさむりのモノローグでも、「…茜屋半兵衛借座敷の段」お園やまいの件をうけての導入だつた。それから口の場の捨子の条にしても、「伊豆院宣源氏鏡」二段目の口・仏酒屋の手法をふまえている。お園のくどきはずいぶん名だかいものだが、「今ごろは半七さん、どこにどうしてござらうぞ…」をかかりにして、「今さらかへらぬことながら…」で地合になつて、おかれた苦境をうつたえつつ半七想う心底をほりさげて、舞台の隅々みまでもしんみりしたペーソスが、しめやかに漂うようではなければならない。というわけは酒屋の段が、世話物独自のリアリズムに則つて、作劇術をすこぶる巧緻につみかさねてゆくためである。まず浄瑠璃の音曲理念を規定する五つの範疇…<恋慕><愁歎><修羅><茶利><節事>が、みごとに綾なされてまつたく一体化をとげている。とりわけこの愁歎は、説経節の軌跡をたどるもの。かつて浄瑠璃に習合されて、やがて歎派

浄瑠璃の文弥節へ。そこで文弥節が<泣き節>と謳われるほどになり、門葉の阿波太夫の<愁い節>ともよばれた秩序を追う。すでに古浄瑠璃においても、<うれい修羅>といつて注目し、主題の機枢にすえてきたものだつた。しだいにこれより誘致されて、新浄瑠璃の世界形成の根幹は<義理><人情>へ。…

一 浄瑠璃は<憂>が肝要なり。…憂はみな義理をもつばらとす。 (「難波土産」)